

# モームとその芸術

矢野道夫 (外国語研究室)

Michio YANO

W. S. Maugham and His Art

モームが人間性を唯一の絶対不変なものと考え、そこに無限の興味を感じると共に、そこに彼の芸術の拠点を見出していることは彼の書いたものを読む人の誰もが認めるところである。併し乍ら、時代に超然としたこの態度は、時代の苦しみを苦しまぬ閑人の寢言である、といつた非難を生み出す。又彼が一生固執して譲らない story-telling という手法も陳腐極るもので少しも実験というものが無い、あらゆる近代的手法は夫々生れるべくして生れたのであり、その必然性に眼を閉じて、少しも自分で前進を期さない所にモームの限界がある、という批評も可能である。だがこうした非難は間違つてはいないとしても、少く共モームにとつては見当違いとなるであろう。モームは喜んでその非難を甘受し、むしろそれを誇とするであろう。何故ならモームは「刻下の政治経済等を取扱うことは小説に小説以上のものを求めることである。勿論小説家はその時事的題材の限界を弁えている限り、天の下の何を材料としようとも勝手だが、私は小説家はよき小説家であればそれで充分だと思ふ」と答えるであろう。そして現今の英国では各芸術に限界を示し、その限界を出た人に不可能なことを試みているのだと指摘してやる丈の教養、知識、哲学力をもつた者が不足している為に混乱が起つている<sup>(1)</sup>、とも云うであろう。又彼が主張するところの小説即物語という考えは深く人間の本能に根ざしたものであつて、これこそ小説の正道であると、満々たる自信をもつて答えるであろう。

次に多くの人々がモームに関して指摘することは、彼の思想に対する不満である。彼の思想は結局自然科学を根拠にした一種のエヒリズムで、人生に何の価値も認めようとしなない。事実、この世に於て価値と考えられるものを次々と解体して行くのが、初期に於ける彼の仕事でさえあつた。後になつて人間がこの世で示す善、即ち right action にのみ不変の価値を認めるに至つたが、要するに「この世に生れた以上は止むを得ない、出来る丈

この世を住みよくしようぢやないか」といつた常識論である。そこに高遠深刻な思想は何一つ見当らない。これを評して皮相浅薄というは実に易々たるものである。併しこの評は些か無いものねだりの感がある。こうした非難をする人はモームが医学を学んで科学の洗礼をうけた人間であることを忘れてはいないだろうか。それ共、苟も小説家たるものは深刻で難解な思想乃至宇宙観を持つべきだ、といつた謬見にとらわれていないだろうか。The Summing Up で述べている彼の哲学遍歴を見るがよい。彼が青年時代から積み重ねて来た読書の跡を調べるとよい。そして彼の思想を乗り越えうる思想を本当に身につけている人が果して何人いるかを考えて見るがよい。モームには信じられないことは信じられないのだ。彼はこの世の何百何千万の人が、漠然と考えたり感じたりしていることを、自分の良心の声として端的に語つたのだ。彼が A Writer's Notebook の最後、1949年の項で次のように書いているのは、彼が考いて尙良心的な探求者であることを示していると思われる。

「私はこの5年間に多分以前より少しは物知りになつた。ある高名な生物学者に偶然出逢つて、有機体哲学に関して浅薄ではあろうが知識を与えられた。それは啓発的で興味津々たる問題だ。それは精神を解放してくれる。科学者が一致している意見では、いつか遠い将来にこの我々の地球は最も下等の生物体さえも養うことが出来なくなるらしい。併しこの状態が来るよりずっと前に人類は絶滅しているだろう。丁度変転する環境に適應出来なかつたあんなにも多くの生物が絶滅していつたように。我々は次のように結論を下さざるを得ない。して見ると、この一切の進化ということは奇妙な徒勞となつている訳だし、おまけに人類の発生を導いた過程も大自然から見れば途方もない馬鹿げたことであつた訳だ。その途方もなさは、キラウエイア火山の噴火とか、ミシシッピ河の氾濫が途方もないのと同じ意味に於てである

が、馬鹿げたことであることに変わりはない。」

以上のようにモームの立場からは世の非難に対して夫々答が用意されているのであるが、彼はもう一つ根本的な答を保留しているように私には思われる。それは彼が作家である前に生活者であつたということだ。人間にとつて「書くこと」よりも「生きること」が先決要件であることは彼の芸術論の示すところである。作家であり乍らあのように芸術をつつばなして考える事の出来る余裕、芸術家としての自己の欠点を暴露する大胆さ、職業作家と自称して憚らぬ敵さ、等はすべて彼が自分の願つた人生の pattern (絵模様) を編み上げた一個の生活者としての自負から来ているのではあるまいか。この自負は1916年の南海旅行で愈々深められたのであるが、こうした生活者としてのモームを背後に考えて、彼に関する疑問が氷解する機会が多いように思う。但し芸術が彼の余技であつたわけでは決してない。彼は文学を専門とする職業作家で文学を彼から引離すことは不可能であるが、何かの偶然で彼の作品がすべて抹殺されたとしても、彼は人生を自分の境遇と能力の許す限り生き得たことに満足して冥するであろう。少く共後述の彼の芸術論から我々はそう考えざるを得ない。この点に於て、彼が1726年のCongreveとVoltaireとの有名な会見に関して述べていることは興味深い。32才の青年ヴォルテールは英国に滞在して56才のコングリーヴと会見した。その時コングリーヴは自分を劇作家であるより、むしろ一個の紳士として考えて貰いたい、と云つた。ヴォルテールは之に対して「若し貴方が一紳士にすぎないなら、わざわざお訪ねするようなことはしなかつたでしょう」と応じた。之に言及して、モームははつきりとコングリーヴに軍配を上げている。モームは「ヴォルテールは当代一流の才子であつたかも知れぬが、こゝでは後れをとつた。コングリーヴの言は深い意味があつて、喜劇作者が喜劇の立場から第一に重んずべき人間は作者自身であることをコングリーヴはよく知つていたのだ<sup>(3)</sup>」と云つている。こゝでは喜劇に関して立言されているが、これは広い意味で彼の芸術全体にあてはまると考えてよい。作家モームの背後に人間モームがぬつと立つているのである。

- 註 (1) *The Writer's Point of View*, P.12  
 (2) *The Collected Plays*, vol. II, Preface  
 (3) *The Summing Up*, 34章

### 1. 彼の絵模様

18才でモームは独乙留学から帰つて来た。そして彼の心は決つていた。彼には官吏になろうが、弁護士になろうが、医者になろうが、それはどうでもよい事だつた。どうせ直ぐに棄て去るものだつたから。彼の目的は一

つ、それは作家になることだつた。唯その当時は良家の子弟として文学を職業とするなんて、恥しくて云えなかつた丈だつた。彼は作家を志望したことについてこんな風にかいている。

「私が物をかき始めた時は、それがこの世で最も自然なことであるかのようにそうしたのだ。私は家鴨が水に就くように書き始めた。私は今でも自分が作家になつていという驚きを拭いきれない。私が作家になつたのは一つの制え難い傾向が私の中にあつたからだ、という以外に理由はないようだ。」<sup>(1)</sup>

この文学的傾向は母方からの遺伝でもあつたろうし、独乙留学の影響もあるであろう。又彼が若い頃吃音であつたことも若干の影響があつたかも知れぬ。併し、この吃音ということをも重大な要因に数えることは明に誤である。何故なら、モーム自身が述べているように身体的欠陥があつても作家にならないものが無数にいるからだ。<sup>(2)</sup> 彼は又、偉大な作家達は何の原因もないのに「羽の生えそろつた若雛が空に巣立つように書き始めた」とも云つている。<sup>(3)</sup> これ等は彼自身に関しても彼の云いたいところであろう。

こゝで注意すべきことは、彼が“I am a writer as I might have been a doctor or a lawyer.” (私が作家であるのは私が医者とか弁護士になつたかもしれぬと同じ意味に於てである) と言明していることである。彼は作家を医者や弁護士と同じ一つの職業と考えた。これは彼に於ては文字通り受取つてよいと思う。世間には芸術家を単なる職業と考えず、何か特別視する者があるが、彼にとつては芸術は人生の目的とするに値しないものであり、それよりもつと大事なこと、即「充実した人生を生きる」という大目的があつた。芸術は彼にとつて生きる事の一部にすぎなかつた。彼は云う、「若し私が全生涯を文学に打込んだならば、もつとまじな作家になつたであろうかと、私は時々自問したことがある。何才の頃だつたか思い出せないが、相当若い頃、私はたつた一つの人生しかないのだから出来る丈のものをそこからひき出して見ようと決心した。書く事丈では不十分に思えた。私は私の人生の絵模様 (pattern) を作らうと思つた。そこでは書くことは重要な要素であるが、その他人間に固有な諸活動の全部を含むものであり、最後には死が給仕上げをしてくれて完全な達成を見る、といつた絵模様であつた。……私は執拗に私の描いた絵模様を追求しつづけて来た。私はそれが完全な絵模様であつたと主張するわけではない。それは私のおかれた環境、天によつて私に許された極く限られた能力をもつてしては、私の望み得る最上のものであつたと思う<sup>(5)</sup>」従つて彼が感官の与えるあらゆる快楽を経験することも彼の絵模

様の中に織り込んだのは当然である。彼には確かにエピソード的なところがあった。*The Ant and the Grasshopper* という小品は彼の生活態度をよく現わしている。例の有名なラ・フォンテーヌの寓話では、冬になつてきりぎりすは蟻のところへ食糧を買いに行くが、蟻は「お前は夏の間中歌いぐらしした、勝手に踊りでも踊れ」といつて追いかえず。神はきりぎりすを働かす為に造つたのではない。少年時代のモームの同情はきりぎりすの側にあつた。この話をきいて後は、当分の間蟻を見さえすれば踏みつけずにはおれなかつた、と書いている。この短篇で彼は所謂「因果応報」は人間界の真相ではないことを主張している。併し彼が単なる快樂主義者に終らなかつたのは、彼が云うように生来の潔癖さ (fastidiousness) の為でもあるし、「充実した人生」という大目的があつたからである。彼は本質的にモラリストであつたのだ。

モームが早くから心に描いたこのパタン (絵模様) の具体的内容について我々は詳しく知ることが出来ない。あれ程自分の事を洗いざらい書いている *The Summing Up* も断片的に言及している丈だ。しかも彼は14年間も結婚生活を送つたらしいが、彼のパタンからすれば相当重要であるべき結婚については口をかんして語らない。併し乍ら、唯一つの事は我々にはつきりしている。彼の心に描いたパタンには作家生活ということが太い経糸となつて編まれていた事だ。自分の人生を思うがまゝに織り上げるには自由が必要であるが、その自由を与えてくれるのは作家生活のみである。他の職業は選ぶまでは自由だが、一旦選んで仕舞えば行動は束縛され、従つてその人のパタンは決定されて仕舞う。ところが普通人にあつては現実からの逃避となる reverie (夢想) が、作家にとつては現実に近づく手段となる。「自分のパタンを思うがまゝに織り上げる<sup>(6)</sup>ことが出来るのは、芸術家と、多分犯罪者のみである」からだ。こうして作家生活を基本線としてあみ上げて行く彼のパタンは彼の小説と同様、始め、中程、終りがある筈だつた。何故なら「パタンの要点はそれが完結されることである<sup>(7)</sup>」からだ。その始めに於ては作家としての成功が予定されていたろう、そして之を彼は1907年に見事に実現した。中程には旅行が一つの計画となつていたらう、彼はこれを前後7回にわたる大旅行で実現した。これは彼にとつて大きな成長を意味した。唯思いがけぬ二度の大戦は全くの予想外の出来事だつた。併し二回共戦争が起ると何の躊躇もなく協力を申入れている。愛国心もあつたらうが、それより冒険 (新しい経験) が彼のパタンに織り込まれていたからだ。最後の終りに於ては、自分の得た経験をまとめて世に示

すことが予定されていたろう。それは小説の形式をとることもあるし、回想、評伝等の形式をとることもあろう。これも見事に彼は実行した。後に残るは万人に訪れる死を立派にやつてのけることのみだ。この成否は未だ判らない。

以上は彼が後年書いた物から想像した彼のパタンであつて、前述のようにその詳細は不明であり、恐らく彼自身に於ても時代と共に変更はあつたであらう。併し我々は彼がどのようなパタンを是とし、どのようなのを否としたかは可成よく知ることが出来る。「最良のパタンは自分の土地を耕し収穫を刈りとり、労働を楽しみ閑暇を味い、愛し、結婚し子供を生んで、死んで行く農夫のそれである<sup>(8)</sup>」と彼はかいている。併し人間は天性と環境の産物であつて、このような正常な理想型は滅多にあるものではない。彼は人生を手握みにし、自分の好みに従つて生きる人に魅力を感じた。彼が短篇小説全集第3巻に三つの短篇 *Mayhew*, *The Lotus Eater*, *Salvatore* を並べて我々に示しているのは決して偶然ではないであらう。その一は彼の可とするパタン、その二は否とするパタン、その三は彼が礼讃してやまぬパタンを現わしているからだ。*Mayhew* に於ては *Mayhew* はデトロイトの弁護士で明敏であつたので、35才で一財産作つてしまつた。ある晩クラブで友人達と酒をのんでいる時、イタリア帰りの友人からカプリ島の眺望絶佳な家の話をきいて、早速それを買いつた。酔つていながつたら、そんな事はしなかつたらうが、一たん買つた以上は後悔しなかつた。やがて彼は家をたんでカプリ島で生活することになつたが、歴史的連想にとんだその地方に刺戟されて、自分で歴史を書こうと思ひ立つ、題目は「2世紀のローマ帝国」。14年間彼は勉強に勉強をつづけた。来た時は強壯であつた彼の健康も放任の結果次第に弱くなつてやせ衰えた。そして龐大な資料を完成し、いざ執筆しようとした時、彼は急死した。莫大な知識も、歴史に名を残そうという野心も無に帰して仕舞つた。それでも彼の一生は成功だつた、と作者は云う。「彼のパタンは立派で完結している。彼はしたいと思つたことをした、そしてゴールが眼前に見えた時死んで、目的の達成から来る辛さを知らなかつた」と。併し自分の好みに従つて生きても失敗する場合がある。次の *The Lotus Eater* がそれである。

舞台は同じカプリ島、妻と一人子に死なれた25才の Wilson はカプリに来てその美にうたれる。そして慎重考慮の末、銀行員生活を棄て、こゝに住みつく。彼は余り金がなかつたので、遊んで暮せる期間は25年に制限されている。(無期限の逸楽も考えられようが、それは最早逸楽でなく苦痛となるであらう。25年と期限を切るこ

とによつて Wilson は一日一日をより鋭く楽しむことが出来たのだ、と作者はつけ加える。) そして25年の期間が来てまだ生きていたら自殺するまでだと Wilson は考えた。誰の為にともならないが、その代り誰にも迷惑をかけない生活が始つた。彼の計画には狂いがなかつたが、唯一つ予想しないことが生じた。それは25年の逸楽生活の後、彼の人格が力を失うということだつた。意志はその力を發揮するには障害物を必要とする、もし平坦な道のみ歩いておれば山に登る筋肉は衰退して仕舞う。それと同じように、Wilson は25年の期限が来て自殺する決心がつかなかつた。彼は日一日とそれを延ばし、借金して一年以上も生き延びる。家主に追い立てられて、木炭ガス自殺を計るが失敗、遂に頭の変になつた廃人となり果てる。そして狩りたてられた動物のような生活を更に6年つづけた或る朝、風景絶佳な山腹で死んでいるのが発見される。モームは未来に苦痛と不幸以外に何も残されない時自殺を肯定する。それだけの意志を持たぬ者は、自分の好む通りのパタンを織る資格がないのだ。第三の *Salvatore* は彼がこの無意味な人生からの一つの救いと考へた善の礼讃である。

*Salvatore* はイタリーの漁師の息子であつた。美しい許婚者が出来たが、兵役にとられ、リユーマチに雇つて帰つてくる。そして許婚者より、一人前の男子の働きが出来ない人と結婚出来ない、といつて拒否される。之は彼の生れた村に於ては当然の結果であつた。彼は悲しみ乍らもそれに堪へた。その中母親のすすめで、自分より年上の醜い女と結婚する。彼女はしつかり者で、老けて見えるが温い愛情を持つていた。彼等の半農半漁の生活が始つた。2人の男の子が生れた。彼は子供の面倒をよく見てやり、又持病のリユーマチが起つた時は煙草を吸い乍ら浜辺にねそべつて、痛みを我慢し乍ら他人に気持ちよい言葉をかけてやつた。彼の眼は彼の子供のそのように率直だつた。モームに依ればここに光り輝く善がある。この世の悪を受容れ、それに敢然と立ち向つて行く善で、それは彼が「作家の手帖」の1917年の項でかいてある「カラマーゾフの兄弟」のアリョーシャ礼讃につながるものであり、又1933年の項で小説に書こうとして書けなかつた実話として述べている Ernest P. なる人物の行動に通うものである。ここには芸術が与える以上の美がある、とモームは考へる。併し乍ら、こうした感動的な善を礼讃し乍らも、これを描くことは人間の中に常に両面を見ようとするモームの文学には困難なことであつた。*Salvatore* も彼の言葉程我々の心を打たないのは彼の文学の当然の帰結と考へられるが、この点に関しては後で触れたい。

以上のようにモームは自分に与えられた天性と環境に於て可能な最良のパタンを織ろうと願つたが、その願ひは必然的に他人のパタンへの関心となつて現われる。彼の文学が常に how to live の探求に向う原因はこゝにある。彼は自分のこうした傾向の原因として、生れつきの整理癖 (natural sense of tidiness) と「現実<sup>(9)</sup>は当然のこととして専ら未来を夢みる自分の欠点」から来ていと云つてゐる。それは欠点でもあらう。併しモーム文学を特色づけているものは、実にこの整理癖と未知の奥へ奥へと進んで行くロマンチズムにある。そしてこの未知なものへの探求は当然好奇心を原動力とする。この好奇心こそ (その好い面と悪い面を合せ持つたまゝ) 彼の一生の key word であると私には思われる。そもそも書く事事で満足せず、人生から可能な限りのものをひき出そうとする態度は好奇心の作用に外ならぬ。彼がロンドンに職を求めたのも好奇心の為であり、様々な旅行、冒険も新しい経験を得る為のものだつた。モームは生来の整理癖と好奇心の導くままに一生のパタンを織ろうとした。併し彼はこのやり方を他に無理に奨めるわけでは決してない。「こうしたパタンの効果と意味は何かと、と問われたら、何も無い、と私は答えなければならぬ。それは私が小説家である為にこの人生の無意味さに課した或る物にすぎない」と彼は云う。だが人生にパタンを設定することがモームの生き方に過ぎなかつたとしても、それは当然彼の芸術や芸術論を決定することになつた。何故なら、彼が人生をパタンとして捕え、そのパタンの構造にメスを加えたのが彼の文学であるし、そうしたパタンへの影響にのみ芸術の価値を認めるのが彼の芸術観だからである。

- 註 (1) *The Summing Up*, 6章  
 (2) *The Art of Fiction*, In Conclusion  
 (3) Ibid.  
 (4) *The Summing Up*, 46章冒頭  
 (5) " , 15章  
 (6) " , 15章  
 (7) " , 74章  
 (8) " , 74章  
 (9) " , 15章  
 (10) " , 74章

## 2. 彼の芸術観

彼の芸術観は極めて明快である。彼はこんな風に説いている。「芸術は贅沢品にすぎない。人間は極めて当然の事乍ら主として自己保存と種の繁殖を重要視する。彼等はこの二つの本能に安全に従事することを可能ならしめてくれる、と彼等が考へる (この考は屢々誤つてゐるのだが) 人々、即軍人と政治家を勲章をももつて飾る。

そしてこの本能が満足させられた時、始めて彼等は作家、画家、音楽家が与えてくれる楽しみに身を委ねるのだ。併し芸術に心を奪われた人々にはこれを悟ることは困難だ。こうした人達の内部には、自分の仕事に完全に没頭させるような、私にはよく判らぬ力があつて、その力に人生を全く従属させてしまうのだ。それは断えざる闘争であつて、彼等は大概自分にとりついたこの本能的な力の駆使に甘んじて仕舞うのである。彼等は何物とも知れぬ或る力に屈服し、人生は彼等の指の間から空しくこぼれ落ちて仕舞う。併し人生は生きられる為にそこにあるのであつて、書かれる為にあるのではない。芸術家は自分の書いたものを、人の心を奪うのではなく、むしろ生活に喜びを附加してやる美しい仕事と見なした方が賢明だ。<sup>(1)</sup>そして芸術が、先ず生きることに従属し、生きることに喜びを与えるものとするならば、芸術はすべての生活者にとって楽しみ味われるものでなければならぬ。或る特定の訓練をうけた者のみに理解されるものであつてはならぬ。「芸術は万人が味えるものである時、始めて偉大であり、意味がある。」<sup>(2)</sup>モームにとって古代芸術、近代芸術の区別はない。あるのは芸術のみである。そしてその芸術は万人を喜ばす (please or entertain) ものである。ここから彼の戯曲論、小説論、絵画論のすべてが展開する。只注意しなければならないのは、この「喜ばす」ことの意味である。芸術が単に喜びを与える丈であつたら、その喜びが如何に精神的なものであろうと、大した価値はない。その喜びは不可避免的な悪に満ちたこの人生の慰安となり、新しい勇気をもつて、その悪に立向う力の源泉とならねばならぬ。即、人格を強め、アリストテレスの right action へと向わせてくれるものでなければならぬ。モームがこゝで芸術は「謙遜、寛容、えい智、雅量を教えねばならぬ」といつているのは少し我田引水のきらいがある。これは彼の文学の特色を語るもので、芸術はそれ以外に魂を天上にまで高める何物かを持つている場合がある筈だからだ。兎に角、芸術の目的は to please である、という考えは彼が機会ある毎に主張するところで、彼の固い信念である。又芸術に特有な「美」の問題も、それ丈では何等絶対的価値を有するものでなく、その美が人格に影響を与える場合にのみ価値がある。従つて芸術を運さずに人間の行為そのものが直接人に働きかけて、これと同じ効果を果すことがありうる。芸術の「美」は「善」に移換されて始めて価値を生ずる。モームにあつては、この善が唯一の価値らしき価値であつて、それは人間性の本源に根ざし、人間が存在する限りこの無意味な人生のオアシスとなるものである。この点に関しては私は別の小

文に於て述べた。

さて、人を「喜ばす」為には芸術はその人に対して何等かの直接的意味を持たねばならぬ。もし小説がその時代時代の悩み、苦しみ、喜び等を取り扱えば、その時代の人は喜ぶであろう。併しそれはジャーナリズムであつて、その悩み、苦しみ、喜びが去ると共に消えて仕舞う。芸術の問題が時と所を超えた人間性そのものに根拠を持つ時、芸術は万人に直接する意味をもつ、かくして彼の文学は国境、人種、時代を超越した人間性の探求と、その人間性の織り出すパタンの追求となつたのは自然の理である。そしてこうした内容を取扱う小説の手法として、モームは story-telling ということをも主張する。これ又、as old as the hills な方法であつて、人間が群をなして生活するようになって以来、最も好まれて来た方法である。ストーリー (筋) は丁度画家の用いる筆や絵具のようなものであり、<sup>(4)</sup>小説が読者に向つて投げられる lifeline である。<sup>(5)</sup>ストーリーのない気分小説は詩であつても小説ではない。小説家はアリストテレスの悲劇のように、始めと中ほどと終りのあるストーリーと、それを取扱う態度に依つて criticism of life を読者に与える。小説は首尾一貫したストーリー、妥当な事件、鮮やかな人物像、自然な対話が、内容にふさわしいスタイル<sup>(6)</sup>で書かれて居れば、小説に要求される全部が満される。そしてこうした小説は我々が知る最も重要な物、即 how to live を教えてくれるというのである。

このように妥当なストーリーを用いて、人間に普遍的な題材を語り、how to live を求める人間に精神的喜びを与えることが小説という芸術の目的であるが、これはあくまでも結果論であつて読者は作品という芸術の結果を見ればよい。それが制作された動機は全く関係がない。否、逆に芸術家は人を喜ばそうとしない時に、反つて最も効果をあげる場合が屢々ある。芸術家は自分の魂の解脱の為に制作するのであつて、丁度女の出産のように魂に宿つたものを吐き出して仕舞わずに居れなくなる。そしてそれを実行した時、彼は始めて魂の平安を得て次の出産に向うことが出来る。<sup>(8)</sup>即ち彼は自己を喜ばす為に書くのであつて、人を喜ばす為に書くのではない。自己を真の意味に於て最も喜ばしたものが、又他を最も喜ばすのが芸術というものであろう。モームはこの間の消息について何も説明しないで、「芸術家は自分の満足の為にかくのであつて、その結果については何等知るところはない。丁度蜜蜂が蜜を集めるが、人間がそれを様々な用途にあてるのを知らないと同様だ」と逃げている。この言葉は彼の体験から生まれたもので、そのよい例は、Of Human Bondage である。彼に依ればこの小説は

決して人を喜ばすことを必要とする職業作家として書いたものでなく、あくまでも自分の中に堪えきれなくなった obsession を脱するために書いたものである。それが他の人を喜ばしたとすれば望外だというのである。その為かこの作には彼の他の作品に見られぬ seriousness が漂っている。主人公フィリップの悩みや祈りが直接読者に伝つて来て、彼が最後に辿りつく平凡な悟り（人間の絆からの解脱でなく、その寛大な受容）の中に我々自身もやつと安らぎを見付けることが出来る。

尙、このように人間性について各作家が書き続けるとすれば、当然行きづまりが来るのではないか、という疑問が起る。何故なら人間性は不変であつて、何時かは描きつくされるからだ。これに対してモームは、作家は自分の idiosyncrasy に依つて人間を見るので、各作家毎に人間の見方がある、と答える。併し個々の作家にとつては限度があつて、最後には自分の書くべきものを書きつくして仕舞うことになる。モームにもこの時が訪れた。彼は自分の歌を歌いつくして、1948年の *Catalina* を最後として創作の筆を絶つたのである。

- 註 (1) *The Collected Plays*, vol. I, Preface  
 (2) *The Summing Up*, 76章  
 (3) Ibid.  
 (4) *The Summing Up*, 59章  
 (5) *The Art of Fiction*, 3  
 (6) *The Writer's Point of View*, P. 12  
 (7) *The Summing Up*, 76章  
 (8) " , 49章  
 (9) " , 76章最後

### 3 彼の芸術

彼は自分の作品については大要次のように評価している。「私の最高傑作は *Of Human Bondage* であると一般に考えられている。併しこの作品はその尨大な長さの故に後世は読まれなくなるだろう。英国喜劇の伝統に従つて書かれた一、二の劇が英国演劇史に数行の記述を確保するかも知れぬ。そして少しばかりの短篇小説が作品集に加えられるであろう。あの世に旅立つには誠に身軽な荷物だが、ないよりはしました。尤も私の判断が誤つていて、死んで一ヶ月経つと全部忘れられて仕舞うかもしれぬが、その時は私はそれを知らないのだ。」<sup>(1)</sup> この言葉の当否は別として、モームは自分の作品の中に彼の理論をどのように実証しているであろうか？

彼は小説 *Liza of Lameth* をもつて作家生活を始めた。そして自分が対話を書くに才があることを悟り、戯曲をかき始め、特に喜劇に独特の才筆を揮つた。遂に1907年、同時に4つの劇がロンドンで上演される程の大

成功をおさめた。これで彼の作家生活の基礎が確立したのであるが、彼はそれで満足しなかつた。幼時よりの不幸な憶い出、惨めな失敗、或はハイデルベルヒでの楽しかつた日々の事が、どつとおし寄せて来てそれを小説の形式にまとめないではおられなくなつた。そこでひきも切らぬ劇場からの注文を全部断つて書き上げたのが *Of Human Bondage* であつた。「私はその当時知つていた事の全部をそれに投入した。そしてそこから再出発をした」とモームは書いている。我々はこゝで一つの事を知らされる。彼は劇作で大成功を収めながら、劇という形式が不完全なものであつて、それに依つては到底自分の思うことを語れないとはつきり悟つたことである。後年彼は劇というものは観客を相手とする以上芸術の中で最もはかない (ephemeral) もので、観客に一夕の楽しみを与えればよい<sup>(2)</sup>、従つてこの形式では半分の真理しか語れないといつて、1933年遂に劇壇と訣別するに至る因子はこゝにまかれたのである。彼の言にあるように、彼の劇は comedy of manners の伝統に従つたもので、巧緻極る会話を主としており、その伝統が存続する限り生き残るかもしれぬ。併し彼の本領はあくまで小説、特に短篇小説に於て発揮されているので、こゝではその点を主として考察して見たい。

モームの芸術論が人間に本質的なものを描き、人生の模様を追求することにより、人に精神的な喜びを与えるにあることは繰返し述べた。モームの芸術は正にそれを実践したものである。一体彼の間人観察に決定的な影響を与えた事件が二回ある。第一回は聖トマス病院で実習して、生のまゝの人間を見た事である。或る日解剖学の実習で、ある神経が異常なところについていることを発見し、解剖学に於ては「正常こそ滅多にないものだ」と教師から教えられる。その時は何気なしに聞いたその言葉がモームの記憶に残つて、遂に解剖学のみならず人間に於てもそのことは真実だと悟るに至る。正常な人間は滅多に見つからないものである。彼がチェホフの平凡さを嫌つて異常な人物、事件を取扱う根拠もここにあるであろう。彼の間人観察への第二回の影響は1916年の南海旅行である。この旅行で彼はそこの土人達の赤裸々な人間性を観察し、自分が今迄おかれていた「文化」の中で、ともすれば見失いがちであつた人間性をとり戻して、彼は自信をもつて人間の本性、生態を説くに至つた。彼はその後、つかれた者のように短篇小説を書き出した。この形式こそモウパッサンで学び、劇作で鍛え、整理癖にびつたりあてはまる芸術であつて、彼がその本領を発揮する独壇場である。彼は出版の当てもないのに、魚が水を得たように短篇を書き続けた。彼には十指

に余る長篇もあるが、その中には短篇の集合とみなしてよいものがある。例えば、彼の一番気に入った作品といわれる *Cakes and Ale* はアシエンデンを通じて回想されるエピソードの集りとも見られるし、*The Narrow Corner* には10人以上の人物が登場し、その各々のパターンが可成詳しく追求されている。

彼の小説の主眼は人間であるから、その人間をとりまく環境は副次的なものに過ぎない。この世のあらゆることがモームの興味をひくが、それは人間現象であるからそうなのである。彼が神や原罪や輪廻や神祕をとり扱ったとしてもそれを信じているからではない。例えば神を扱った *Catalina* の意図は神を常識にまでひき下ろすことであつたし、*The Painted Veil* で道教を説かれてもキティが最後に辿りつくのはカソリックであり、そのカソリックはモームとは何の縁もない。*The Razor's Edge* でラリイが対決する悪の問題は、かつてモームの通つた道であろうが、それがその時モームに切実な問題であつたわけではない。只キリスト教国で育つた西欧人の多くがいくど悩みとして提出されているにすぎない。短篇 *Honolulu, P. & O., Lord Mountdrago* で彼が神祕思想を扱つたとしてもそれに特別興味がある訳ではない。どんな人間がそういう場におかれるか、そしてその場に於てどんな態度をとるかたまたま彼の好奇心を刺戟するのである。

人間の本性を掴むためには、彼は価値と考えられるものを次々と解体して、彼自身のモラルに依つてそれを再建する。彼は所謂正義を信じない。彼の *mental balance* は不可避的な悪 (evil) を軽減するものに依つて充足される。*The Moon and Sixpence* で画家の生涯を描いても、そこにあるのは美の讃仰ではなくて、反つて美の軽視である。美というものが、それ丈では如何に無価値で冷酷無残なものであるかを示したものと云つてよい。彼は好んで女を描いた。彼の短篇全集に盛られた91篇の中で実に半数に近い数が女性心理追求に向けられている。そこで先ず槍玉に上るのが貞操である。彼は「貞操なんか糞くらえです。破壊と不幸しかもたらさない貞操には何の価値もありません。そんなのを貞操と呼びたかつたら、そうしなさい。僕は臆病と呼びますよ」と *Virtue* の中で云つている。貞操を死物狂いで守ることは決して神も嘉さないであろうことを現わしたのが、*The Judgment Seat* である。そしてこれに対立する女性像としてモームがもつて来るのが、*Cakes and Ale* のロウジーであり、その類型は諸所に見出される。即ち、利己的で不しだらで欠点だらけであるが、思いやりがあり、男を悩殺する (irresistible) 女である。この原型は

勿論マノンであるが、之はモームが好きな型というより、彼が人間の本性から結論した女の型であろう。彼自身は母性を好んだであろうが、この娼婦型がモームの中の小説家を喜ばすのである。又彼は屢々女を「自分が信じようと欲するものしか信じない」執念の塊として描いている。女の執念をテーマにしたものが、短篇丈でも8篇も見出されるのは何か彼には女に含むところがあるのではないかを思わせる。併して注目値することは、モームが故意に女性を歪めている感じは全く感じられないことだ。女の生理として、本来的な生態として、そうなるということを読者に納得させる力をモームは持つていたのである。何故モームはこのように女を描くことに力を注いだのであろうか。外にも理由があろうが、一番大きな理由は彼が男であつたからだと思ふ。モームは男性も勿論描いたが、その場合人間全体の問題として取扱われていることが屢々ある。男性であるモームには男は余り興味がない。少く共、異性の心理構造程には彼の好奇心の対象にならないのだ。

モームは人間性があるがまゝに見ようとした。彼が処女作 *Liza of Lambeth* で試みたことは、彼の全作品を通じて余り変つていないのは驚く程である。彼は白状しているように生れつき人間は好きな方ではなく、話すより聞く方を好んだ。その彼が後年人間を描いて絶品を残すに至つたのは、ひとえに彼が持つて生れた観察力と修練のお蔭である。彼が *Liza of Lambeth* で示した観察力、会話の才、臨床的で傍観的な態度、そして *Liza* のパターンを最後まで追求する鋭さは彼の全作品を特色づけるものである。同時に彼の長所と短所も又、そこに明示されている。彼の冷静な観察態度は人間の本性を剝出して余すところがない。然もそれが冷酷な人生態度とならないのは、表面の cynical 乃至 humorous な態度と違つて、彼の皮膚下に真摯な人間に対する善意が潜んでいるからだ。読者は彼の示した人間を見て、自己を含めた人間全体に対する諦観と寛容を得るであろう。それは決して小さな事ではない。併し乍ら人間に絶望もしない代りに信頼、礼讃をしない彼の態度は自から彼の文学を限定するかせとなるであろう。

彼は人間を異常で非合理的なもの、矛盾の塊と見た。昔の作家は人間を首尾一貫した性格を持つた者として描いたが、人間を矛盾した複雑なものとして提出したのはスタンダールの「赤と黒」に始るとモームはいつている。そしてこゝに小説の難しさがある、とモームは考える。(5) 何故なら、主人公の矛盾した行動を示せば、読者はそんな事はあり得ないと考えるからだ。併し人間の本性は厳として矛盾のまゝ存在している。こゝにモームのジ

レンマがあつた。相矛盾する諸性質が不思議な調和を保つて共存しているのが、人間の実態であるなら、それを描き出すのがモームの課題であつた筈だ。モームはそれに挑んだ。彼はある異常と思える行為の plausible な動機を見付けるのに作家精神の大半を打ち込んだと云つてもよいであろう。「ある行為に終つた動機を考える程興味あることは滅多にない」<sup>(6)</sup> 私はこの言葉程、モームの人間と作家の本領を同時に現わしたものを知らない。結果は成功した時もあるし(例 *A Casual Affair*)、失敗して投げ出した時もある(例 *A Friend in Need*)。だが人間の本质が矛盾にあるとしても、それをそのまま描くのが果して小説 (fiction) の役目であろうか。成程、人間を矛盾した存在と観ずれば、我々は他人に対する寛容、諦観を得ることが出来る。他人の悪に対して肩をすくめてみせる余裕も生じて来よう。それは人生を或る意味に於て楽しくさせることになるであろう。併し芸術の効果はそこで終るであろうか。楯の両面を見るような態度で、人間精神を最高の「善」へと飛躍させる力が生れるであろうか。否である。この欠点を誰よりもよく知つていたのはモーム自身である。彼の文学には「偉大な作家のも

つ親密感、巾の広い人間味、動物的晴朗さ<sup>(7)</sup>」を欠く原因の一半はここにある。モーム文学の醍醐味を味いながらも、彼をして偉大な作家に今一步の感をいだしめるのは、人間を矛盾のまま提出しようとする態度とその困難性に内在しているのである。モーム文学を批判しようとするなら、題材の旧套を嘲つたり、手法の陳腐を指摘したり、或は思想の平凡をあげつろうよりも、先ず彼の人間提出の方法自体の検討から始めるべきである。

註 (1) *A Writer's Notebook*, 1944年の項

(2) モームは散文劇のことを云つているので、verse で書かれたものは別に考える。

(3) *The Art of Fiction*, Flaubert and *Madame Bovary*

(4) *The Summing Up*, 19章

(5) *A Writer's Notebook*, 1941年の項

(6) If you are interested in human nature there are few things more diverting than to consider the motives that have resulted in certain actions. (*A Casual Affair*)

(7) ……it is impossible that my work should have the intimacy, the broad human touch and the animal serenity which the greatest writers alone can give. (*The Summing Up*, 22章の最後)